

江戸時代の名古屋城と城下町の観光

石田 泰弘（愛西市生涯学習課長）・種田 祐司

キーワード

名古屋城 道中記 天守 金鯢 七里の渡し 三里の渡し

美濃路 佐屋路 津島街道 枇杷島橋 旅籠 本町 玉屋町

東照宮祭礼

はじめに

近世は旅ブームの時代といわれている。武士や商人、農民に至るまで様々な階層の人たちは余暇を利用して、様々な旅に出かけた。伊勢参りのような信仰を目的とした旅の他にも、名所旧跡を訪ねるような旅、保養のための温泉旅行等々、今日でいうところの観光的な旅も少なくなかった。期間的に見ても遠出して長期に及ぶ旅もあれば、日帰りで観光地をめぐるといった旅もあり、旅のあり方もまさに多様であった。いずれにせよ旅は、日常生活から解放された、非日常的な世界を楽しむ時間であり、時には自然や景観を愛で、時には湯治や娯楽を楽しむ、リフレッシュする脱日常の世界であった。だから、必ずしも遠出の旅ばかりでなくとも、身近な名所や風光明媚な景観を訪ねたり、名物を楽しんだり祭礼を観たりして、短期間ながらも各地へ出かけ、脱日常の世界を楽しむことも多々みられた。そうした状況は、名所図会や栗毛物のようなガイドブックの書物や、各地に残る道中記や旅日記といった史料からも垣間見ることができる。

東国地域に残る道中記を調査し、東国の民衆が宮・桑名間をどのようなルートを通ったかを検証した際、東国の旅人の多くは、往路は東海道を通って伊勢へ詣で、その後上方等を経由し（時には西国にまで足を伸ばす事例もあった）、復路は中山道を通るケースが多かったとする^①。さらにその旅程の一部、宮・桑名間においては、東海道の正式ルートともいべき七里の渡しを利用するいわゆる七里の渡しルート、宮から美濃路を通り名古屋の町に入る前に分岐する佐屋路ルート、佐屋路へ向かわずそのまま北上し、名古屋の町を通過し、須ヶ口辺から分岐する津島街道ルートとその他のルートに分類し、検証した結果、七里の渡しルートは全体の一割にも満たず、脇往還である佐屋路ルートも二割に満たず、圧倒的多数が津島街道を利用し、佐屋・津島から三里の渡しで桑名へ向かった。

なぜ、津島街道ルートを利用する人々が多かったのか。その要因として、一般には七里の渡しは舟路をとることから、天候に影響されることが多く、佐屋廻りが利用されたといわれている。そうした要素も幾分考えられるが、もしそうであれば、それは佐屋路ルートを利用することでクリアできたはずである。津島街道ルートを採用した要因としては、恐らく名古屋、甚目寺、津島といった見所が多かったからではないだろうか。例えば、道中記を紐解いてみても、伊勢神宮をはじめとする有名寺社や、江戸、京、大坂といった都市の記述が数多く見られるように、せっかくの旅だから見所を見てまわろうというパワーが道中記から伝わって

くるかのである。関東から名古屋へ向かう途中、東海道を離れ、秋葉山、鳳来寺を経由している事例が多いことから裏付けられよう。事実、道中記の多くに熱田神宮参拝、名古屋城の金の鯨、枇杷島橋といった記述が数多く見受けられる。名古屋で宿泊したケースもあった。

以上は石田がすでに発表した論考があり、本稿は、東国地域に残る道中記の名古屋に関わる記述に種田とともに着目し、当時の観光の実態や実情を解明しようとするものである。「一」「五」を石田が、「四」を種田が、「二」「三」「はじめに」「おわりに」は共同で執筆した。

一 宮から南寺町まで

東海道を進み、三河から尾張へ入り、宮に至る。まず宮の町に入ると入口に板橋があり、渡ると左に姥神があった。宿を抜けると追分があり、ここでルートの選択を迫られる。このまま宮から七里の渡しで桑名へ向かうのか、それとも佐屋まで陸路で行き、佐屋から三里の渡しで桑名へ向かうのか。『石巻の歴史第九巻資料編三近世編』所収の「伊勢参宮旅日記」によれば、宮の項において、「此所より伊勢へ舟二乗候ハ、大神宮へ参詣ニ参るべからずと云、必ず舟二乗る間敷事、宮より佐屋へ往還有ト聞、然シ名古屋へ相廻り候かよし」とあるし、『梁川町史資料集第二十七集』所収の天保三年の「伊勢参宮日記」においても七里の渡しについて「是決而乗不可乗下向ノ節桑名ヨリ宮ハ乗候ハヨロシト申」とあるように、七里の渡しを選択するのではなく佐屋廻りを選択するものが多かった^③。佐屋廻りといっても、名古屋城下へ入る前に岩塚、万場へ向かう佐屋路を経由するルートと、名古屋城下を訪れ津島街道を通り、津島・佐屋から桑名へ向かうルートがあったが、前述のように多くは名古屋

屋城下を通り、津島・佐屋から桑名へ向かうルートを選択した^④。

この追分を右に行くと、熱田神宮へ出る。熱田神宮は道中記によって「熱田（大）明神」、「熱田皇大神宮」、「熱田太神宮」といった様々な表記がなされているが、多くの旅人がこの熱田神宮へ立ち寄る名所であった。前掲『梁川町史資料集第二十七集』所収の天保三年の「伊勢参宮日記」によれば、門を入り、絵馬堂、拝殿、本社を参拝し、裏門から出る^⑤。そこから名古屋迄の道程は「町つゝき」（町統）と道中記に記されているように、熱田・名古屋間も恰も名古屋の町として旅人は捉えられていた感がある。世田谷区教育委員会の『伊勢道中記史料』所収の弘化二年の「伊勢参宮覚」によれば、西御堂あたりも名古屋と捉え「尾州名ごや町甚大きし」と記す^⑥。『土浦市史資料第一集伊勢道中日記史料』所収の文化四年「伊勢道中日記」によれば、宮から名古屋までは町統でその境界は一の鳥居であったと記す^⑦。

二 名古屋城下町観光

宮から名古屋へ向かう道中にも観光地は多い。東御坊、西本願寺、栄国寺、大須観音、清寿院、七寺、若宮八幡といった場所が道中記に散見する。東御坊は今日でいうところの東別院で「東掛所」とも称した。門前には参詣者を対象とした旅籠が何軒あった。西本願寺（西掛所）ともに普請の素晴らしさが記されている^⑧。中でも東別院は、『墨田区古文書集成Ⅲ』所収の文久二年「伊勢参宮致道中覚之帳」によれば、「式拾七間四面」で、「山門惣彫もの」「敷石ハ惣みかげ」石で、「御本坊より普請宜敷御門跡ニ而は日本寺に御座候」と記す^⑨。栄国寺には十五間四方の大松の下に釈迦仏の足跡石があったという^⑩。大須観音や清寿院界隈は、

軽業・芝居等が行われ大いに賑わったという様子は『尾張名所図会』にもその様子が描かれていることからうかがえよう。

大須界隈を抜けるといよいよ名古屋城下町の中心部に入る。城下町名古屋について、多くの道中記は「御城下すべて江戸の町の如し」^⑪、「御城下賑ナルコト江戸同前」^⑫、「当町（名古屋…筆者注）之儀も誠に江戸の通り、大都会に御座候」^⑬というように、江戸に匹敵する町であったと記す。野辺地町野坂忠尚家文書「東海道道中記」によれば、「東海一の城下」^⑭とも記す。時には、梅津猪五郎によれば「御三家第一江戸二も不劣見事也」^⑮、菅原源八によれば「城下家造日本第一也」^⑯とあるように、当時の名古屋の町が日本有数の町であったことを伝えている。安房の鍋屋嘉兵衛によれば、「東海道公宿之内、沼津、府中、尾州いづれもよろ敷候得共、尾州一ばん也」^⑰と記す。

いくつかの道中記には名古屋城下町の家数が記されている。これは出版された多くの「道中案内記」には記されていないので、城下で町人から聞いたのであろう。少ないもので二万八千軒、多くて十三万軒である。実際の城下の町家は、人口約六万人から推測すると一万数千軒と思われるので、最小のものでも過大である。次に尾張藩の石高についても触れると、五〇万石から六五万石までの記載があり、正しく六一万九千五百石とするものは四分の一ほどしかない。やはり多くの「道中案内記」には各藩の石高が記されていないので、多くは現地での聞き書きであろう。

城下町には「能き店数多ク御座候」^⑱というように、多くの商家が立ち並び繁栄した町でもあった。伊藤次郎左衛門、十一屋、水口屋といった名古屋の商家の他、大丸屋、松前屋といった上方資本の出店もあった。進藤貞吉の記録によれば、「名古屋は瀬戸店仰山なり」とあり、瀬戸物

を扱う店も数多くあったという^⑲。進藤の記録によれば、「晴雨考を買はんとて書林へ立寄り候処売れきらし候よしなり。又々書林を式三軒吟味いたし候処右同様なり」というように、名古屋は書肆の町としても知られていた。貸本屋大惣こと大野屋惣兵衛や永楽屋東四郎等全国的にも著名な本屋が名古屋にはあった。「大和廻り絵図」^⑳や「桶狭間古戦場由来」といった書物を名古屋で購入している。三河国宝飯郡前芝村の加藤みゑは西国を廻り帰路の途中名古屋へ立ち寄り、「操り」を見物したり、「いとう呉服店」にてショッピングしたりしたという^㉑。名古屋は「一宿して見物いたしべき城下なり」^㉒であった。

名古屋の町には、何といつても、金の鯨を擁する「日本一の名城」^㉓名古屋城があった。管見の限り、名古屋を通った記録で名古屋城を記録しない道中記はないといって過言ではないほど人気の観光スポットであった。次項で詳しく述べる。

名古屋の町を通過すると枇杷島の橋を渡る。「尾張名所図会」においても描かれているように、枇杷島の橋は二つあった。大橋と小橋で記録によつて若干数値は異なるが、概ね大橋が七十二間、小橋が二十五から三十間と記されている。「大日本国名橋見立相撲」という番付によれば、「前頭」に「琵琶（嶋）橋」が記されている。

三 名古屋城観光

名古屋城は、江戸時代においても名古屋を代表する観光スポットであったことは相違ない。ただし、城下から見えるのは天守・隅櫓・石垣くらいなので、記録もそこに集中した^㉔。なかでも天守の金鯢は特筆しているものが多い。寛政六年に名古屋を訪れた阿部によれば、金の鯢を擁

する名古屋城を「日本一」と評している。⁽²⁶⁾野辺地の野坂忠尚家所蔵『旅日記関係史料下巻』によれば、「御城も音二聞しより結構、御国許御出立以来覚なき御城二御座候。天守両しち黄金之よし。遠見二もきらきら光り渡り見得申候」とあり、名古屋城が有数の名城であったとする。酒田市立図書館蔵年不詳「伊勢参宮道中記」によれば、「必御城を拝見すべし」と記すように名古屋観光には欠くべからざる観光スポットであった。

旅人は城内に入ろうとしたのであろうか。そもそも旅人が城内に入れたかの前に、武士以外の名古屋の町民が入れたかどうか検討したい。⁽²⁹⁾三之丸には多くの重臣屋敷があり、ここには多くの町人が商品の納入や所用のために入り込んでいたのである。⁽³⁰⁾さらに三之丸には東照宮や天王社があり、一般の人々も参詣できた。城下から三之丸に入るには、西より巾下門、御園門、本町門、東門、清水門の五門のいずれかを通らなければならず、いずれの門にも門番が常駐していて、不審者に目を光らせていた。ただし入場許可書や鑑札のようなものを提示する必要はなく、自由に通ってよかったのである。

道中記では「丸之内ハたひ人ハとふせ不申候」⁽³¹⁾、「旅人は御城へ入事不叶」⁽³²⁾、「三之丸より内ニ他所者不入」⁽³³⁾というように、旅人・他所者の入構は許されていなかった、と記された道中記もある。恐らく堀越もしくは遠目から名古屋城を観て通ったのであろう。しかしながら、各地の道中記を紐解くと、「御城内廻り見物」⁽³⁴⁾、「御郭之内拝見致ス」⁽³⁵⁾というように城内を見物した事例は少なくない。茨城県立歴史館江橋家文書所収年不詳「西国道中記他」によれば、「丸の内者所の者のふうにして見候ハ随分拝見相成申候」とあることから、旅人・他所者の入構はできなかった

が、「所の者」すなわち地元の住民の振りをすれば入構できたという。

実際、「裾をさげぞふりをはき当地の府にして御門の内へはいれハ何のとがめも是なし」⁽³⁷⁾とあることから、地元住民の体であれば入構できた。『生駒藩史』所収の文化八年「伊勢参宮道中記」によれば「先達二十四文にて頼み」⁽³⁸⁾「名古屋城見物致」したとあり、案内を雇って入構することもあった。現在でいうところのガイドがこの頃には存在していたことがわかる。甲斐素純『近世上方道中記』によれば、天保二年に名古屋城を訪れた際に、天守の金鯢、新御殿を見物したとある。⁽³⁹⁾静岡県歴史情報センター所蔵安政七年「道中記」によれば、「御城二之丸（三之丸の間違い：執筆者注）へ入、所々拝見いたし、二之丸二而さけのうり茶や、うゑ木や、金魚うり、あめや、其外見せ物いろいろ、二之丸之内二而モ是誠ニ参詣おひたたく御座候」と三之丸において、出店や見世物が行われ賑わっていた様子を記す。⁽⁴⁰⁾また、『梁川町史資料集第二十七集』所収の天保三年「伊勢参宮日記」によれば、「御城・御堀・大手」を廻り、「石垣・御門・天子（守）・矢倉結構ナルコト筆紙ニ尽カタシ」と記している。⁽⁴¹⁾

なぜ名古屋城に入れる、入れないの差が出たのであろうか。入れなかった五例を調べると、名古屋に宿泊したのは一例もなく、「入れる」の大半が城下の旅籠に宿泊していることが確認できる。つまり名古屋城に入るためのノウハウは、旅籠で得たものと推測できるのである。⁽⁴²⁾

四 城下の旅籠

道中記に記録がある名古屋の旅籠は、表1のとおりである。住所がわかるものでは本町六、七丁目が多い。そもそも名古屋城下には旅籠がど

のくらいあったのであろうか。幕末に幕府道中奉行が編纂した『宿村大概帳』美濃路の名古屋の項では、「旅籠なし」となっている。もちろん城下には前述のように旅籠が存在していた。城下の旅籠の全体像は、明治四年刊の『名越各業独案内』に詳しい。その内容は表2のとおりである。旅籠には「諸国御定宿」「庄屋衆商人宿」「懸所参詣宿」の三種類があり、このうち旅人が通常泊まるのは「諸国御定宿」で、これは玉屋町一〜三丁目（本町五〜七丁目）に集中している（図1）。「庄屋衆商人宿」は、娯楽の旅ではなく仕事の旅で泊まる旅籠のことである。「庄屋衆」とあるのは、訴訟沙汰などで名古屋の代官所や勘定奉行所などに訴え出た、あるいは呼び出された庄屋たちが泊まった宿である。江戸の「公事宿」に相当するものであろう。「庄屋衆商人宿」の分布をみると、城下に散在しているが、本町筋の一つ東隣の七間町筋と、美濃路の一部ではあるが京町筋の本町から西側にやや集中している。ほかに城下南部の下茶屋町に「懸所参詣宿」が何軒かあり、これは東本願寺懸所に参詣・所用で訪れた者には便利な位置にあった。表1と表2とは①〜⑥の旅籠名が一致する。このうち①は「庄屋衆商人宿」、②は「懸所参詣宿」である。とくに①は何らかの事情があったのかもしれない。

五 名古屋の祭礼

道中記を紐解くと、旅行者が名古屋を訪れた際にほかの祭礼の記録等が散見できる。ここではいくつかの事例を紹介したい。『寒河江市史編纂叢書第23集』所収の年不詳「見聞録」によれば、「名古屋のさい札花麗也、但し作り物八年々定期居申候よし、車二而引人形ちいさくして上二而仕ふ、房トまくよし、台いろ取々ぬり金めつきの金物、まくハにし

ききんらのたぐい、目をおどろかす」と記す^{④5}。この旅行者一行は四月十七日に名古屋を訪れていることから、東照宮祭礼の様子を記していることになる。岡崎信司『西国道中記』によれば、天明元年六月十五日の条に「町に入候得ば、御さいれいにて、町にぎやか成り、大さいれいなり、皆々町内より作り物出し申し候得ば、みなしようじようひ等のましまく、皆金入等もふる類なり」とあり、丸の内天王祭の様子を記す。安政三年「金毘羅参詣道中日記」によれば、二月二十四日に「天神様の夜宮ニテ賑也、思々ニ遊ニ出る」、翌二十五日に「天神様へ参詣、植樹市ニ而賑なり、久兵衛様焼物屋へ尋寄、爰二本を川崎迄頼ミ羊羹を貰イ」とある^{④7}。桜天神の祭礼の様子を記している。

おわりに

本論では、名古屋の住民ではない庶民の旅人が名古屋や名古屋城をどう見たかを紹介した。名古屋城はたとえ城内に入らなくても、天守や金鯱は旅行者からは見ることができた。名古屋城が名古屋観光のメインであることは、今も昔も変わらない。また、比較文化学では「文化は他者しか記録できない」というが、これは江戸時代の名古屋について、地元民がわざわざ記録しないことを他国の旅人が記録する、という事実にあてはまるのではないか。

表 1 道中記にみる名古屋の旅籠

本町 5 丁目		
笹屋清助③	1 人	128 文
本町 6 丁目		
駒屋	2 人	200 文, 木 50 文 「悪キ宿也」
桑名屋半右衛門⑤	5 人	200 文
升屋六兵衛	1 人	木 28 文
新銭屋長兵衛	2 人	180 文「旅亭甚あしく」
舛巢屋六兵衛	1 人	木 40 文
銭屋所次右衛門⑥	12 人	150, 150, 164, 180, 180, 214 文, 2 分 100 文, 300 文
塚本屋久兵衛	1 人	木 40 文
本町 7 丁目		
近江屋清八④	3 人	214, 200 文「浪華講」
茶屋町		
布袋屋四郎兵衛②	1 人	150 文
下押切町		
鍋屋惣吉①	1 人	金 2 朱つり 200 文
町名不明		
いさわや左衛門	3 人	132, 148, 150 文
丸屋治兵衛	1 人	
信濃屋与七	1 人	172 文
刀屋長七	1 人	
内海屋源（孫）右衛門	1 人	132, 140 文
旅籠名不明	1 人	40 文

凡例：人数は宿泊した記録がある人数。

金額は旅籠賃、1 つで 1 人を表す。

「木」は木銭 「 」は道中記の記事

丸数字は表 2 に対応

表 2 名古屋城下の旅籠

種別	町名	旅籠
諸国御 定宿	玉屋町一丁目	笹屋清助③
		東屋清助
		三都屋与三兵衛
		尾島屋半七
		江州屋重助
		河内屋善蔵
	玉屋町二丁目	香具屋吉兵衛
		桑名屋半左衛門⑤
		銭屋所治右衛門⑥
		丸一屋小七
		今井屋小八
	玉屋町三丁目	近江屋清八④
		加見屋半助
		加見屋彦十郎
		駒屋庄次郎
		岡山屋金治
		華屋半七
		丸屋治兵衛
		若葉屋久助
		小西屋伊助
	庄屋衆 商人宿	茶屋町二丁目
上園町一丁目		丸屋文左衛門
東魚町一丁目		中島屋藤左衛門
富沢町一丁目		新屋与吉
八百屋町一丁目		大島屋清助
		知多屋茂兵衛
伏見町一丁目		三河屋嘉助
七間町一丁目		玉屋琴三郎
長者町一丁目		知多屋仲右衛門
		菱屋久助
上園町三丁目		丁字屋芳蔵
長者町二丁目		柏屋弥助
広小路		松屋宗七
富沢町三丁目		信濃屋忠右衛門
	万屋久兵衛	
掛所参 詣定宿	押切町三丁目	鍋屋宗七①
	下茶屋町	鶴屋要吉
		布袋屋四郎兵衛②
		丸屋藤七
菱屋忠助		

『名越各業独案内』（明治 4 年）より

丸数字は表 1 に対応



図1 名古屋城下旅籠分布図

註

- (1) 石田泰弘「道中記からみた宮・桑名間の交通について」『尾張藩社会の総合研究七』(二〇二〇年)
- (2) 文政六年『石巻の歴史第九巻資料編三近世編』(一九九〇年)「伊勢参宮旅日記」
- (3) 天保三年『梁川町史資料集第二十七集』(梁川町・一九八九年)「伊勢参宮日記」
- (4) 1に同じ
- (5) 3に同じ
- (6) 弘化二年世田谷区教育委員会『伊勢道中記史料』(一九九四年)「伊勢参宮覚」
- (7) 文化四年『土浦市史資料第一集伊勢道中日記史料』(土浦市・一九八八年)「伊勢道中日記」
- (8) 宝暦十年二戸市教育委員会『旅へのいざない』(二〇〇三年)「伊勢参宮道中記」
- (9) 文久二年『墨田区古文書集成Ⅲ』(一九八九年)「伊勢参宮致道中覚之帳」
- (10) 天保十一年『成東町史料集特別編3』(二〇〇五年)「旅中記」
- (11) 8に同じ
- (12) 3に同じ
- (13) 文久三年小川八千代『昔の旅』(一九九四年)「伊勢両宮・大々御神楽旅中之日記」
- (14) 文政十二年野辺地町野坂忠尚家所蔵『旅日記関係史料下巻』(二〇一二年)「東海道道中記」
- (15) 文久二年梅津猪五郎『梅津猪五郎参宮順道記』(一九九九年)
- (16) 文政十年菅原源八翁顕彰会『菅原源八旅日記』(一九九五年)「上方道中記」
- (17) 天保十五年城山古文書会『鍋屋嘉兵衛の道中記』(二〇一二年)「諸国参詣道中日記并鹿島参詣道中記」
- (18) 文政十三年落合延孝「中澤茂七の長崎道中記」『群馬大学社会情報学部研究論集』十九卷(二〇一二年)
- (19) 安政七年相馬登「進藤貞吉『道中記』(五)」『北方風土』七十一号(二〇一六年)「道中記」
- (20) 文化元年茨城県立歴史館所蔵須田家文書「よろつおほえ帳」
- (21) 嘉永五年『小川町史上巻』(一九八二年)「伊勢太々・金毘羅道中記」
- (22) 文化八年『愛知県史資料編東三河』(二〇〇八年)「道中記」
- (23) 16に同じ
- (24) 安政六年鎌田道隆「安政末年伊勢参宮道中記」『奈良史学』二十六号(二〇〇八年)「伊勢参宮道中記」
- (25) 美濃路は本町筋から京町筋に入り、五条橋で堀川を渡る。そこから堀川端を廻り堀江町で左折する。しかし、左折せず堀川端を廻ると五・六百メートルで外堀端に出る。そのあたりは天守がかなり近くに見える。ただし、旅人が実際に外堀端まで入ったかどうか不明である。
- (26) 寛政六年阿部彰昭『伊勢参宮所々名所並道法道中記』(一九九二年)
- (27) 14に同じ
- (28) 年不詳酒田市立図書館蔵「伊勢参宮道中記」
- (29) 手形は、旅人の住んでいる町村の庄屋・町代などが旅人の身分を証明した書類で、性質としては現在のパスポートに近い。
- (30) 二之丸は藩主家族の住居なので、名古屋の町人も入ることはできない。ただし、藩主家族のために食料・燃料・衣装・調度品を納入する御用達町人、あるいは御殿や庭園に関わる職人たちは二之丸に入る必要があった。あらかじめ御小納戸役所から交付された鑑札(門鑑)を二之丸門で提示したのである
- (31) 嘉永二年青梅市教育委員会『道中日記他』(二〇〇四年)「道中日記」
- (32) 文久元年『猿島町史資料編近世別巻』(一九九五年)「伊勢参宮路用帳」
- (33) 延享三年『平鹿町史料集第六集』(二〇〇四年)「伊勢参宮道中記」
- (34) 文政二年『六ヶ所村史下巻Ⅱ』(一九九七年)「伊勢参宮道中記」

- (35) 文久二年 鶴岡市立図書館所蔵文書「大神宮金毘羅道中日記」
- (36) 明和五年 茨城県立歴史館江橋家文書「西国道中記」
- (37) 文政十一年『八幡町史資料編二』(一九七一年)「伊勢并大和廻道中記」
- (38) 文化八年『生駒藩史』(一九七六年)「伊勢参宮道中記」
- (39) 天保二年 甲斐素純『近世上方道中記』(二〇一六年)
- (40) 安政七年 静岡県歴史情報センター所蔵「道中記」
- (41) 天保三年 前掲・『梁川町史資料集第二十七集』「伊勢参宮日記」
- (42) 旅籠で名古屋城内見学の情報を得たと思われる旅籠は、ほとんど別々の旅籠であった。城下の多くの旅籠で名古屋城案内を行っていたのであろう。
- (43) 「金鱗九十九之塵」(『名古屋叢書』正編六・七卷、一九五九・六〇年)によれば、「玉屋町」の項に次のようにある。
- 此市中は古より、駅路に習い、旅籠屋御免の所なれば殊に賑し
- (44) 「尾州御留守日記」(徳川林政史研究所蔵「尾張徳川家文書」尾二・六四第二冊) 文政十年三月～四月の条によれば、七間町二丁目の庄屋宿近江屋久左衛門が、御小納戸役所に「御小納戸役所御用宿」と唱えたいと願書を出している。その理由は、玉屋町の旅籠では御用の者と他国者が同宿するので、大切な書類の管理が心配であるから、というものである。それには「御小納戸役所は、古来御用の者が宿泊する場合、玉屋町の旅籠でも「相宿(相部屋の意であらう)」をしないなど充分対応してきたので、近江屋の願いは許可できない、としている。ただし、「定府奥向」の者が近江屋に泊まるのはかまわない、としている。
- この件から、すでに文政年間には玉屋町以外に商人・庄屋・藩士などを対象にした旅籠が城下で営業していたことがわかる。一般の旅人は、本町通り以外の旅籠は目に入りにくいので、御用宿にはほとんど宿泊しないであらう。
- (45) 年不詳『寒河江市史編纂叢書第23集』(一九七七年)「見聞録」
- (46) 天明元年 岡崎信司『西国道中記』(一九八八年)

(47) 安政三年 山本光正「史料紹介『金毘羅参詣道中記』」『国立歴史民俗博物館研究報告』四(一九九二年)「金毘羅参詣道中日記」

《Title》

Sightseeing in Nagoya Castle and Nagoya Town in Edo period

《Keyword》

Nagoya Castle, Castle tower, Golden Dolphin, Shipping Route of Seven-ri, Shipping Route of Three-ri, Mino-ji, Saya-ji, Tsushima Highway, Biwajima-bridge, Hon-machi, Tamaya-cho, Toshogu-festival

キーワード

桶狭間合戦 長福寺 「古戦場討死人別」 「今川勢討死者位牌」 「林阿弥の弥陀記・鑑記」 「義元公御霊像記」 渡邊玄蕃遺品 六角家援軍 『江源武鑑』 『三河後風土記』 『絵本太閤記』

はじめに

桶狭間合戦をめぐる研究・論評は数多く、古くは江戸時代より考証が重ねられてきた。ただ、古い考証本は、『甫庵信長記』や『絵本太閤記』等による脚色部分を分離していないため、近代以降も虚実綯い交ぜの考証が続けられたが、信長の家臣・太田牛一著の『信長公記』の解析に基づく藤本正行氏の論考^①により、合戦の実態に迫る道筋が付けられた。しかし、それでも『信長公記』の解釈や軍勢配置に関する見解が数多く出されている。本稿はその流れに依らず、地元に残る特異な合戦伝承を検証することを目的とする。

現在の桶狭間古戦場は、羽賀祥二氏が論証されたように^②、東海道沿線にあることで江戸時代より「名所」として顕彰されたため、豊明市の国史跡「桶狭間古戦場伝承地」は今川義元の墓や顕彰碑が林立する公園として整備されている。公園西側の香華山高徳院境内には今川義元の本陣碑もある。ただし、義元本陣の場所については、山を隔てた名古屋市緑区側の新興住宅地となった山の中腹にも碑があり、その西麓には古戦場

公園がある。この公園には近隣より発掘されたという義元の墓碑がある他、周囲には今川勢の陣所や、義元や今川勢の供養を行う和光山天沢院長福寺（以下、「長福寺」という。）が存在する。同寺は義元的首検証を行った場所とされ、本尊の阿弥陀如来像は、首検証を命じられた義元の茶坊主・林阿弥によって合戦後に納められたと伝わる。

二つの古戦場伝承地が所在する自治体が違うこともあり、古戦場、特に義元本陣の場所に関する見解主張は、江戸時代から現在に至るまで止むことはない。現在でもなお本家主張が続くことは興味深い現象であり、管見の限りここまで積極的に本家主張が行われている古戦場は他に無い。予想外の大將討死という合戦譚ゆえに、どうしてもその定点を特定したいという欲求を掻き立てるのだろう。

この古戦場遺跡の一つ長福寺には、他にはない独自の伝承・記録が継承されている。それが本稿で紹介する史料1「古戦場討死人別」（以下、「人別」という。）や、史料2「今川勢討死者位牌」（以下、「位牌」という。）二基、今川方の武將・渡邊玄蕃の遺品類と史料3「林阿弥の弥陀記・鑑記」・史料4「義元公御霊像記」である。このうち「人別」には信長方へ近江国の六角家が援軍を出したとの記述がある。この記録は紙質から判断して古くても江戸時代末期を遡ることはない。後述するように六角家援軍の記述は江戸時代で既に偽書とされた書籍か、俗書の類にしか記されていないため、この記録を基に桶狭間合戦に六角家の援軍が派遣されたと言及するつもりは毛頭無い。